

Bersih 2.0

——「分かりやすい政治」へ向かうマレーシア——

鈴木絢女*

2011年7月9日、首都クアラルンプールで、「クリーンで公正な選挙連合 (Coalition for Clean and Fair Election)」による集会が行われた。「Bersih」(マレー語で「クリーン」の意)として一般的に知られるこのグループは、野党、人権 NGO、記者団体などによって2005年に結成され、選挙委員会の独立性の確保、架空の有権者を含むともいわれる有権者リストの修正、投票時の改ざん防止インクの使用、不在者投票制度の充実、選挙キャンペーン期間の長期化などを要求してきた。2007年に行われた Bersih による集会は、2008年総選挙での連合与党・国民戦線 (Barisan Nasional、BN) の勢力後退の一因となったともいわれている。

10万人規模の集会になるという Bersih の予告を受けて、内務省はこの集会を違法としたうえで、Bersih のシンボルである黄色い T シャツの着用を禁止、構成団体であるマレーシア社会党党员を拘束、Bersih リーダーや野党幹部のクアラルンプール入りを禁止するなどの措置をとった。さらに、集会決行の当日は、クアラルンプールの交通が封鎖されるとともに、催涙ガスや放水車を備えた大量の警察官が配備され、Bersih や野党リーダー、赤シャツを着て対抗集会を決行した最大与党・マレー人国民組織 (UMNO) 青年部リーダーらを含む 1000 人以上の逮捕に帰結した。

妥協点の模索から対決へ

「Bersih 2.0」と称される今回の集会の狙いは、次期総選挙にむけて、選挙制度改革へのプレッシャーを強めることにあった。

現在の下院議員の任期は 2013 年までだが、総選挙が今年中に実施される可能性は高い。というのは、現在、与党 BN には 2010 年以降の好景気とナジブ首相の 69% にもおよぶ高い支持率という追い風があるうえ、就任から 2 年以上経ったナジブ首相がいまだに選挙の洗礼をうけていないという事情や、政府債務削減のために燃料や食料の補助金削減を急がねばならないという事情があるからである。

総選挙が近いという予測のもと、Bersih 側は、クアラルンプールでの 10 万人規模の集会実施のための許可を申請した。公正な選挙を求める大規模な集会は、政府のイメージを下げることはあっても上げることはない。政府は、大方の予想通り、Bersih による集会許可申請を却下した。

やがて内務大臣と Bersih リーダーの舌戦が始まり、前者への共鳴が広がり始めると、ナジブは「穏健な首相」として表舞台に登場し、国立スタジアムでの集会を提案した。Bersih に声を上げる場を提供すると同時に、2007 年の集会で見られたような街頭での警察と集会参加者の衝突を避けることを狙った提案だった。

Bersih 側は、スタジアム内での集会開催には同意したが、具体的な場所として、クアラルンプール中心地により近く、また、1957 年の独立宣言が行われたという意味で政治的なインパクトの大きいムルデカ・スタジアム (Merdeka Stadium) での開催を要求した。しかし、クアラルンプール中心地から

*福岡女子大学講師

のアクセスのよいムルデカ・スタジアムでの集会を許可すれば、結局街頭での集会に帰結すると政府は考えたのだろう。「穏健」カードは功を奏さず、Bersih と政府は妥協が成立しないまま集会当日を迎え、大量逮捕という事態に陥った。

ただし、政府と Bersih の対決は、逮捕者数の多さのわりに、さほど激しいものではなかったようである。Bersih は、交通規制にもかかわらず 5 万人が結集したと発表したが、政府発表では 1 万人、国外メディアでも 1 万 5 千人と見積もられており、当初発表された 10 万人の目標を下回る規模となった。さらに、警察による催涙ガスや放水車の使用の頻度は 2007 年の Bersih 行進時よりも低く、また、逮捕者のほとんどは同日中に釈放され、拘置所内での逮捕者の対応にも細心の注意が払われるなど、警察による暴力の程度が低かったという指摘もある。政府、ひいては BN に対する嫌悪感を助長しうような警察と Bersih との激しい衝突のシーンがなかったことで、Bersih 2.0 のインパクトはそれほど大きくなかったかもしれないという声が、集会の参加者からも出てきている。

選挙制度改革か、政権交代か？

集会から約一週間が経過したが、この間、政府、Bersih、野党やその支持者の間での非難合戦が続いている。たとえば、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの facebook では、ナジブ首相辞任を求めるプロフィールが人気を集めている。野党やその支持者はここぞとばかりに政権交代を呼びかけ、他方で与党や政府関係は、Bersih が野党の道具になっていると難癖をつける。結局、Bersih 2.0 後のマレーシア政治の主たる関心事は、Bersih の本来の目的である選挙制度改革プログラムそのもの

ではなく、政党間の競争になってしまった感が否めない。

民主政治の質向上のための運動がもたらした「与党対野党」という党派政治をめぐる議論に収斂してしまった原因は、Bersih 内での野党の存在の大きさにある。なかでも、人民公正党 (PKR) の事実上の党首アンワルのメディア露出は際立っていた。ツイッターを用いた頻繁な情報発信、警察との衝突時に負ったとされる軽症の手当を受ける様子の公表に加え、Bersih の記者会見の写真を見れば、著名な Bersih リーダーの隣にアンワルが座っているものが多い。さらに、Bersih 参加者の一部は、1998 年にアンワルが政府閣僚を更迭された際の反政府運動のスローガンである「レフォルマシ (改革)」コールを復唱したという。また、アンワル個人のみならず、党も、地方の党員を集会に動員したり、党幹部レベルの逮捕者を複数出したりするなど、Bersih 2.0 に力を入れた形跡がある。

2008 年選挙以降、PKR は、役員や州政府運営をめぐる対立から多数の離党者を出し、最大野党の地位を野党連合のパートナー民主行動党 (DAP) に譲った。補欠選挙や州選挙でも PKR の敗北が目立っている。このような背景から、PKR は、Bersih 2.0 を失地回復の契機ととらえたのだろう¹。

次期総選挙での支持獲得を目指した一部の野党とは異なり、Bersih リーダーは、この運動が政権交代を目指すものでも野党を支持するものでもなく、

¹ 逮捕者の数やメディア露出度では、PKR と同様に支持を減らしつつあるマレーシアイスラム党 (PAS) の存在も目立った。他方で、PKR、PAS と連合を組みながらも、2008 年以降着実に支持を伸ばしてきた DAP は、他の二党ほどの熱意を持ってこの集会に関与していない。

しばしば類似性を指摘される中東のジャスミン革命とも本質的に異なると釈明している。とはいえ、野党の動員力や影響力は明らかに大きく、与党や政府側は、もっぱら野党の戦略として Bersih 2.0 を理解した。このため、党派的利益に根ざす議論が選挙制度改革を圧倒するようになったのである。

ナジブ首相は、有権者名簿や選挙キャンペーン期間、不在者投票に関する Bersih 2.0 の要求を考慮すると明言している。しかし、党派政治を軸とした理解が優勢であることを考えると、選挙制度改革の進展の見通しははっきりとしない。

制度の揺らぎとシンボリズム

Bersih 2.0 とその後の政治を特徴づけるのは「分かりやすさ」である。「政府 vs. 野党」という党派対立に関する議論が民主的ルールの改善をめぐる議論に優越する言論状況や、黄シャツ(Bersih)と赤シャツ(UMNO 青年部)が対峙する場面は、マレーシア政治のダイナミクスが二元論的な枠組みによって最もよく把握されうようになっていくことを示している。しかし、このような「分かりやすさ」は、しばしば具体的な政策や改革プログラムの中身に関する議論の成熟を妨げる。また、このような政治のあり方は、人々の動員を容易にし、政府と野党の対決を深め、野党による政権交代をめざす運動にもつながりうる。アメリカ人ならば、「政権交代がありうるということは、政治が競争的であるということであり、より民主的であるということだ」と結論するのもかもしれない。しかし、分かりやすいシンボルやイメージに基づいて政権交代が起こる場合、新しい政府が望ましい統治を行うとは限らないことを、我々は既に知っている。

さらに、分かりやすいシンボルに基づく動員は、

異なる立場のグループ間での話し合いや交渉の余地を狭め、健全な討論なき対決につながりうる。これまでのマレーシア政治は、与党連合内の取引や、諮問機関における政府と社会の対話など、交渉と妥協を軸に展開されてきたというのが筆者の理解だが、このような政治のあり方が変わりつつあるのかもしれない。

「分かりやすい政治」へ向かう傾向は、マレーシアに限った現象ではない。東アジアのいくつかの国では、これまで安定的であった優位政党や王制といった制度が動揺した結果として、シンボルを拠り所とする政治が台頭している。分かりやすいシンボルのもとで、人々が十分な政策論争をする間もなく動員され、分裂状況に置かれれば、交渉の可能性は限りなく小さくなり、対決が政治の常態となる。このような政治のあり方は、より安全で自由な豊かな社会の実現へと我々を導くのか。Bersih 2.0 の展開には、人ごとではない問題が内在しているように思えて仕方がない。(2011年7月19日)